

落日のバレット峠

独立速射砲第十八大隊の最期

三重県 藤森 庄之助

満州の独立守備歩兵第二十五大隊で叩き込まれた大和魂で、勤務、討伐に従事していた私は、満期除隊した時から召集のあることは覚悟していたが、「今朝、君のお宅から駐在を通じて召集のあったことを知らせてもらった」と上司から言われた。「昭和十九年三月二十九日、中部第三十八部隊に入隊せよ」とのことである。早速、下宿へ帰り荷物をまとめて家に帰る。

久居の連隊（歩兵第三十三連隊留守隊）で二カ月余を過ごし、六月十日、一泊二日の外泊許可が出て、家族や親戚、特に、老父母、兄弟との別れはつらいものがあった。

京都伏見の第三十七部隊の営庭で新しい軍服を支給された。私は現役当時の同年兵、岩野、衣田と共に夏

服である。久居の第三十八部隊からは我々を含め三十名が第三十七部隊に転入したのである。同年兵では、既にインパール作戦や中支の作戦で散った戦友もいる。戦友同志では「南方行きの軽装だから、玉砕かそれとも全滅になるかな」と語り合った。

第三十七部隊には三日いて、昭和十九年六月十八日大阪港から輸送船で出港である。中隊長は川村中尉、第一小隊長大林少尉、第二小隊長稲田少尉、弾薬小隊長矢野曹長、指揮班長森田軍曹で、外に四名の下士官、独立速射砲第十八大隊第三中隊といい、戦況によっては指揮系統が変わるかもしれないと思っていた。

輸送船が門司に着き、下船民宿をする。「香椎丸」が出航するので、最後の手紙の投函を門司の民宿の奥さんをお願いした。釜山へ寄港、船団は輸送船二十六隻、空母一隻だと暁部隊の兵隊が言いくそうに言った。釜山寄港は満州の部隊を乗せたらしい。船の中は蒸し暑く、室内はまるで病室のようだ。どこへ上陸するのか、レイテかマニラかどちらでもよい、早く上陸したかった。台湾沖の馬公で一泊、南に向かった。船

団護衛の艦載機が船の上空をぐるぐると旋回していたが、突然低空し、一瞬また一瞬上昇した。数秒後、海底から凄いい火柱が上がった。「敵の潜水艦をやったぞ」甲板から歓声が上がリ、船酔いで唸っていた連中も万歳を叫び、喝采して喜んだ。

船団は米軍の報復を予期し、対潜監視兵を増し、海の色や波の動きも細心の注意を払うよう指示されていた。しかし、突然、ドカンと大きな音が闇に響き、轟音とともに、輸送船の一隻前の航空母艦から、パッと赤い凄いい火柱が舞い上がり、辺りは火の海となった。母艦は真つ二つに割れ、中央からの炎は天を突き、艦首と艦尾が海にのまれていく。甲板を右往左往する乗組兵士の姿が燃えたぎる炎の中に見え隠れした。わずかな間に母艦は海に吸い込まれていく、一瞬の悪夢である。後の輸送船も隣の船もやられ、すさまじい火炎は天を焦がし、ついに完全に海中に沈んだようだった。船は船体をガタガタと震わしながら全力で走っているようだった。

やがて、比島のバターン半島やコレヒドール島が見

えてきた。昨夜の敵潜水艦の攻撃により、空母一隻、輸送船六隻を失い、数多くの尊い命が海中に没してしまつたという。

ようやくフィリピン・ルソン島のマニラに上陸し、マニラ防衛軍の基地マッキンレー要塞のある所へ連れて行かれ兵舎に入った。川村隊は兵舎から少し離れた広場に集合した。将校以下五百人余りが集合したので、小林大隊長（少佐）は、

「我が日本軍は、このフィリピンでアメリカ軍と一大決戦を敢行し、一挙に敵を粉砕し、大東亜戦争を決定的なものにしなければならぬ。我が国にとり、最も重要な戦線である。我が神国の生命線を守り、敵を撃滅する重大な任務を与えられた。我が大隊はその一端を担い戦えるということは日本男児の本懐であり、名誉ではないか。全員一致して、この難事に当たり、その成果を挙げよう」

「今、我が軍には兵器、弾薬、医薬品、食糧が乏しい。兵器・弾薬は諸子の忠誠心と旺盛な勇気をもって捕い敵を破砕し撃滅すればよい。食糧は現地調達が主

だが、この戦いの進捗状況で窮乏してくる。その時がきたら敵陣に斬り込み、食糧を奪うのだ。バターあり、コンビーフあり、チョコレート、煙草、栄養満点の食糧が山積みしている。これを我々の食糧にして戦うのだ。なんと愉快ではないか」と。

我が大隊長も、方面軍の將軍や参謀の訓示を受け、それを受け売りしているのか……。

この訓示は、我々兵隊にとって酷であり、耳にこびり付いて離れなかった。しかし、大隊長は五百余人の大隊の兵に答礼された。これが最期の別れになろうとは、その時、我々は予想もしていなかった。

独立速射砲第十八大隊は我々の第三中隊（川村隊）だけをマニラに残し、バギオに転進していった。その後、我が第三中隊は、昭和十九年十二月三十一日にマニラを後にバギオにいたる大隊を追ったが、途中、北部ルソンの山岳のバレット峠で鉄兵団（第十師団）に配属され、ついに直属する大隊の最期も、戦友の生死も知ることにはなかった。しかし、我が大隊の最期は、公刊戦史によると、「昭和二十年八月十日、イラガン河で

架橋作業止むなきに至ったところ、十九日に敵に遭い、戦鬪し、敵戦車三両を破壊したが、二十一日、全弾を撃ち尽くした」とある。

アメリカ軍のマニラ占領は、マニラ防衛軍の戦力では防衛できず、敗北は現実となり、戦死者を増し玉碎していったという。

十二月三十一日の大晦日の夜、川村速射砲中隊に転進命令が出た。隊はルソン北部を指して、夜陰に乗じてマニラを後にし、日比部隊（第十六師団搜索第十六連隊）と共に転進した。多分、バギオにいる小林部隊（我が大隊本部）に追及するものと信じ、命令するまま北へ進んだのである。

中隊は、昼間は敵の観測機に脅かされ転進が思うようにいかない。夜行軍をしたが、遅々として進まぬ行軍に気をもんでいた。それでもサンミゲルを過ぎ、ババング河の上流の町カバナツアンの近くまで進んでいた。近づいていくにつれて爆弾や砲撃の跡が生々しく、道路も破壊されたところも各所に見られる。この部隊が、かなり悪戦苦闘をしいられたようで、

転進した様子から激戦の様相が窺われた。また爆弾で建物は半壊し、町には人影なく死んでいるようである。軍の山田第一二九兵站病院も全壊し、薬品の瓶のようなものが散らばっていた。砂糖工場や病院の残骸の中に食糧になるようなものは何も見当らなかった。病院跡から患者用白衣を一枚、夏衣の予備にしようと背負袋に入れた。

中隊は米軍の攻勢を避けながら北進し、まだどうにか占拠していたバレット峠を越えて、サンタフェからアリタオに向かい北進し、パンパンの近くまで進んでいた。日本兵にとっては観測機は機銃射撃や爆弾を装備する大型機より恐ろしい存在なので観測機を異常なほど警戒していた。

我々は稲穂を摘むにも芋を掘るにも、絶えず上空監視を忘れなかった。我々は観測機の静かな飛行音を耳にすると、餌食にならぬよう芋や薬などで偽装し、じつと警戒して、やがて見えなくなると行軍を始め、また、食糧を探した。もし観測機に発見されたら、数分後には爆撃機が飛来して爆弾を落としていくが、迫撃砲の

砲弾が炸裂して破片を播き散らすからだった。

パンパン付近まで来ると、何か緊迫した戦闘のようなものが身を感じられた。「アメリカ軍はマニラ付近全域を制し、兵を北に進めて北部に転進する日本軍を追っているようだ」と小隊長は話をしていった。中隊は、集落を避けて月光を頼りに始動した。共に北進していた鉄兵団の戦車を伴った部隊は、昼間は食糧の確保に忙しく、少数の兵隊が食糧探して戦死したことを知っていたらしいが、今更、危険を冒しても遺体を捜すこともできなかったようである。

中隊は昼夜兼行の行軍だったので、静かな夜道を歩くと、前に行く兵隊の装具に当たり、ハッとしてまた歩く、半眠りでの行軍だった。そんなとき、ほんの微かな音色だったが尺八の音が聴こえてきた。特有のむせび泣くような、切々と何かを訴えるような音に耳を澄ました。私の足取りも心なしか軽くなったようだ。名残を惜しむ想いがこもったように聞こえた。

翌朝、小隊長は小声で「聞こえたかい」と囁いた。「尺八の音でしょう。なんだか胸が締めつけられるよ

うでした」と私が答えると、小隊長の潤んだ目には朝の光が眩しかったようであった。小隊長は「俺もだ。あれは戦車隊の佐藤大尉の尺八だと思う。かすかではっきりしないが、あの大尉殿に違いないと思うよ」。二人共、この戦争で生涯を終えるかもわからないし、また、生きていることがあっても、ほんの一時でも、心の奥に残る尺八の調べはもう聴くことがないと思った。二人にとって忘れ得ない一時の想い出であった。

中隊長は何か感じるがあったのか、夜明けとともに行軍を中止した。各小隊に分散を命じ、空襲に備えて退避できる壕を急造し、上空を監視するよう命じた。隊長の予想通り、付近一体の空に轟音を響かせ敵機が編隊を組んで現れた。我々は皆慌てて急造の壕や遮蔽物に身を隠し見守った。敵機は中隊や小隊には目もくれず、約三百メートル足らずの先の大きな椰子林のある集落を攻撃していた。迫撃砲の音とともに、椰子林に囲まれた集落はたちまち燃え尽き、全体が黒雲で覆われたように見えた。歩兵部隊も迫撃砲と機関銃で全滅に近い打撃を受けているのではないかと思った。

この椰子林に陣地を敷いていた我が軍の歩兵も戦車隊も全滅したかに見えた。一台の先頭戦車が、猛スピードで前方に並んでいる敵の迫撃砲陣地らしいところを目指して突進していくのが見えた。そして、すぐ後から、また、一台が続いた。どれだけ敵陣に迫ったか分からないが、続く一台の戦車は火を噴いているように見えた。先頭を走る戦車は佐藤大尉ではないだろうか。それに違いないと思った。覚悟をしていたのか、大尉は戦車と共に死に華を飾った。「同じ戦死するならば、あのように散りたいものだ」と小隊長は呟くように言っていた。戦車の悲壮な最期を我々は目の当たりに見た。集落も椰子林も焼かれ、草一本もない状態のようであった。アメリカ軍は、凄まじい爪跡を残して引き揚げていった。

マニラを出発し、我が大隊小林部隊を追及して二カ月ほど過ぎ、ようやくバヨンボンに着くことができた。ここまで転進するのに精も根も使い果たしてしまっただようだ。その苦しみで中隊長も幹部も痩せ、兵隊は疲勞困憊していた。ここで中隊長は、一旦停止。小隊長は

「我々は鉄兵団に配属となり駐屯するらしい」と言われた。そのころは、アメリカ軍は、リングエン湾に龐大な上陸部隊を積み込んだ大船団と護衛艦を揃えていたという。夜間は信号や標識灯で昼のようであった。

リングエン付近の守備に当たっていた「盟兵団」の兵隊は、まるで市街のネオンを見るようで、ただ口をあぐりと開けたままだったそうだ。そして、大がかりな艦砲射撃と爆撃を繰り返した。ここを守備する盟兵団や各部隊は精根の限りを尽くして戦ったが防ぎきれず、アメリカ軍の上陸を許した。上陸敵軍はルソン島の中央サンホセに向かい、この兵力で北部ルソンに進する日本軍を攻撃したそうである。

そのような戦況を我々は細かく知る由もなかったが、中隊はバギオに行けなくなった。それは確か昭和二十年三月中ごろだったと思う。鉄兵団に配属され、バヨンボンからバレテ峠付近の山岳陣地に着くことになっていたという命令を、小隊長は皆に言いにくそうに「また、逆戻りだ。バレテ峠に行くらしい」「あの深い山の中へか」口々に不安らしい表情を露骨に現わして

いた。私もまた、危機を孕む戦場に向かうような感じがした。まだバギオ転進に未練を残しながらバレテの山岳に向かった。

北部ルソンの重畳果てしない山岳地帯、特にバレテ峠付近、サラクサス峠付近の山岳戦では、日本軍は屍を晒し、その惨状は目を覆うばかりであった。日本軍は兵器弾薬に乏しく、空軍に至っては、その影さえ見えず、その上腹を抱えた兵隊では戦いにならず、バレテ峠付近の山岳に折り重なって屍を晒したのである。山間の岩穴にも傷ついて倒れた兵士が重なり、そこを流れる川は血に染まっていたという。戦争が終わって、現地人は日本兵の血に染まったこの峠を「血の峠」と呼んだという。

つい先ごろ、バレテ峠を越えたときには、峠付近での日本軍の守備は、まだまだ大丈夫だと考えられた。しかし、この付近の要地は、敵の厳しい攻勢の繰り返いで、既に敵の手中に陥ちた陣地もあったようだった。折角通った道を、危ない思いをして、また、逆戻りとは情けないと皆が愚痴をこぼしていた。「仕方がない

命令だから、前に通ったときよりかなり情勢は悪く危ないようだ」と兵隊は不安そうであった。

アメリカ軍は、バレテ峠の山岳地帯に戦力を集中してくるだろう。「俺たちも、いよいよ激しい戦いに巻き込まれるかな」「隊長殿が上司から命令を受けられたら兵隊にその命令を下す。これは隊長の義務だ。戦死せよと言われなくともそれしかない。これが軍規というものかな」と、それとなくこれからの戦いの厳しさを言い聞かせていた。

この付近は平和なら住み良い村だろう。そんなことを考えながら、兵隊たちは裏腹にだんだんと身に危険が迫ってくるのを感じた。「バレテ峠のどこかの山が俺たちの墓場かな」と村上兵長が呟くように言うと、高村上等兵は初年兵に「おい右側を見ろよ、美しい水の三途の川が流れている」と首をすくめて笑った。「この川下の取り残しの稲穂や芋やバナナともお別れかな」と岡上等兵は寂しげに振り返り、何か大切な物を手放すように言っていた。

山裾を縫うようにして道は登り、川はだんだん下方

に向かっていた。第二小隊が通りかかったとき、頭の上をすれすれにプルンと大きな音とともに物体が右側の中ヘドスンと落ちた。咄嗟に小隊長は「逃げる」と大きな声で叫んだが、逃げ場などあるわけがなく、岩のくぼみに体を縮めていた。小隊長はスルスルと川底の見える道際まで身を乗り出して覗いていた。「多分不発弾だ、でっかい奴だ」とホッとしたようで、出発の号令を出した。小隊長は「多分、長距離砲弾と思うが、爆発したら二小隊は全滅だったろうな」と第一分隊長に話をした。私も第二分隊の兵隊に「どこから発射されたのだろう。薄気味が悪いな。しっかりしろよ」という天の声だと思った。

右側に遠く霞んで見えるのが「サラクサス峠」かも知れない。もう血みどろの戦いをやっているだろうと思った。目前がバレテの山岳だ。俺たちは今、その山中を進んでいる。我々には、バレテの山岳でアメリカ軍と戦う運命が待っている。「おい見ろ、バレテの山裾まで来た」とだれかが言ったので、私は「ついに俺たちの死に場所が決まったようだな」と言った。

小隊の兵隊たちは、敵が目前に迫っていることも忘れて、和やかな気分できて、私も少しも危険を感じなかった。南国の土人が叩くような音がしたように思ったら、突然、迫撃砲弾がすぐ近くで炸裂した。散った破片が、岡上等兵の背中を挟み取った。剥がされた部分が飛び腹の皮に支えられた彼の臓物は、まだ生きているのかピクピクと動いた。その傍らの石野一等兵の右足は付け根から破片で切断され、鮮血は付近を赤く染めていた。私は初めて戦争の残酷さを見せ付けられ、余りの悲愴さになす術もなく立ちすくんでしまった。

ハッと我に返り、戦友を励まし、その遺体を横にして、申し訳程度だが二人の遺体に木の葉の混ざった土を載せ、手を合わせて冥福を祈った。戦友の亡骸を葬ることのできたのはこの時だけのようだった。その後には戦いも激しくなり、中隊でも数十名の戦友を亡くしていったが、その屍さえ確認することもできず、自分の命を守るのが精いっぱいであった。中隊で初めて戦死者を出し、一度に二名の分隊の友を失った。冷たい亡骸に別れを告げ、坂道を急いだ。

知らぬうちにバレット峠の山中の中程まで進み、山岳戦に参加していた。中隊は山頂や谷間をすれすれに飛ぶ観測機に発見されぬように上空に注意を払いながら、各小隊、各分隊ごとに自分たちの壕を造った。中隊は岡本鉄兵団に配属され、林部隊について戦うのだと小隊長はいっていた。バレット峠では、付近の深い山岳を金剛山、榛名山、天王山、妙高山、西山、東山、南山、北山、少し離れて高千穂山、笠置山などの名称で呼んでいた。大小幾つかの部隊を配置して、アメリカ軍の侵攻を防御するため備えているという話だった。

敵は日本軍の予期しない全く意外と考えると、道を作り、戦車を先頭にして進攻してくるのだった。日本軍は常にアメリカ軍に意表を突かれていた。日本軍には敵の行動を逐一調べることのできる探知器を持っている部隊は少なかった。この辺は以前日本軍が守っていたらしく、山の中腹や山裾に壕が掘ってあった。

山頂の対空監視哨が「敵機来襲」と三回叫んだ。爆弾を投下されたのか、爆発音で叫び声が消された。突然、ザーッと音を立てて旋風を起こして、第二小隊の

いる山を含めて付近一帯に機銃掃射を浴びせてきた。小隊長の「各分隊退避」という必死の叫び声があった。第一分隊は「小隊長も早く」と叫びながら山裾を転がるように退避した。壕は深くなかったが、皆重なるようにして伏せた。

半時間くらいしただろうか、敵機は去り、迫撃砲の音も消えた。幸いにして第二分隊は無事だった。対空監視は敵機来襲と知らせてくれたが、恐らくあの叫び声が最期の絶叫のようであった。

私は何だか小隊長が心配になり、逃げ遅れたのではないかと、もしかしたらの嫌な予感もあった。小隊長は最後の兵が退避するのを確認するため残ったが、不幸にして最後の兵を見届けたと思ったとき、被弾されたのだ。「東に向けてくれ」と抱えられた兵隊に言った。皆の「東に向いておられます」と言う声に「うん」と頷いて、故郷の母を呼んでいるようだった。私は小隊長の傍らに寄りつけず申し訳なく思いながら、小隊長との最期の別れをした。希望に満ちた青春をバレテ峠の山中に閉じたのだった。気さくで部下に優しく何

でも話し合える戦友であった。

この機銃掃射と爆撃の中で、戦死したものと考えていた大田一等兵の冥福を祈りかけていたが、彼はむっくりと起き上がった。土埃のついた髭を見たとき、私は大田の肩を抱き、無事でよかったなと我が事のように喜んだ。

バレテ付近の山岳地帯はアメリカ軍に占拠されてしまい。敵は鉄兵団のどの要地でも攻撃することが容易だったらしい。だから我々には敵がどこから攻撃してくるか分からず、攻撃するにも、防御するにも予想がつかぬが、手を拱いているわけにはいかない。部隊の大小は問わず、必死になって敵の来襲しそうな地点を予測して防陣地の構築に努力を重ねていた。

アメリカ軍は日本軍の北の転進部隊を攻撃するため部隊を増強し、日本軍の転進を阻止しようとしていた。これに反撃するため鉄兵団は急遽、林部隊に攻撃を命じたようである。我が速射砲大林小隊は中隊長よりの命を受け、夜を徹しての強行軍で、夜通し、小型牽引車トラックで走り、一小隊はサンホセの近くに着いた。

大林少尉は、アメリカ軍との戦いはかなり苦戦と覚悟し、小隊の兵隊も小隊長と共に斬り込み戦死しようと語り合っていた。

途中、カバナツアンまで進んだとき、もうそこには日本軍はいなかった。大林小隊が到着したときは、敵は既に退却しており、原田機関銃隊も引き揚げており、大林小隊も一名の犠牲者も出さず自分の陣地へ戻ることができた。それは昭和二十年二月二十八日から三月一日のことであった。

敵はますます接近し、我が小隊の南野、岩野両名が狙撃され即死した。敵はもう近くまで迫っていて、毎日観測機に監視され、思いもかけぬ所から攻撃を受け、戦死者を出していくだけでは話にならなかった。その翌日、中隊の移動があり、各小隊は別行動で小高い山を越えた。中隊はそれぞれ、岩穴や壕を掘り、アメリカ軍の攻勢に対し万全とはいえぬが防御態勢を整えた。二日を経過したら、第一分隊の陣地から約五百メートル余りと思えるバレット峠山裾の道路を越えたところに、敵の戦車とブルドーザーを発見した。第一小隊は

ブルドーザーを初めて確認した。バレット峠の日本軍を包囲する目的か、戦車や歩兵部隊、トラックなどを通すための道路を作る機械化部隊だと、第一小隊長は見た。敵は第一分隊の速射砲陣地があることを知らない。小隊長は眼鏡を手にして、敵戦車やブルドーザーを鮮明に捉えた。この作業部隊を逐一観察していたが、たった一日で日本軍を襲撃するため必要な道路を数十メートルは完成していた。

三日もすれば、敵は戦車は勿論、装甲車、トラックの道を完成し、峠付近の我が軍を攻撃するようにさえ思えた。そして敵は全くの無防備のようだった。小隊長は速射砲の遮蔽物や偽装の除去を命じた。第一分隊長の「位置につけ」の号令で発射準備ができた。「分隊長発射します」と四番砲手。「まだまだ。一発必中させ、次のブルのやつを撃つのだ」と砲手を引き締めた。小隊長は合図を送った分隊長の「撃て」の号令で発射され、先頭のブルは破壊され、分隊長の「次のブル撃て」の号令で発射されたが、二両目には弾が当たらなかった。

敵の迫撃砲が我が速射砲が撃ち出すのを待っていたかのように攻撃してきた。この迫撃砲は四連発だそうで、我が一分隊が息つく暇もないくらい攻撃してきた。真っ先に速射砲は破壊された。敵の攻撃はますます激しく、とても耐えられず、小隊長は退却を命じたが、歩兵銃二挺、手榴弾・拳銃では応戦しきれず、小隊長は中井伍長を中隊に走らせ救援を依頼した。中隊長は伊藤伍長を長とする一個分隊の兵で援護を命じた。中隊長は「十分注意しろ。敵に遭遇したときはできる限り戦わず避ける工夫をしていけ」と注意したが、隊長の危惧は的中だった。敵戦車についている歩兵の一団に遭遇したが、我が歩兵銃と敵の兵器では比べ物にならない、中井伍長は重傷、兵一名戦死した。また小銃で応戦した伊藤伍長も部下と共に戦死。この遭遇戦で、敵弾から逃れた五名の兵のうち三名負傷、残り二名は辛うじて中隊へ戻った。伊藤・中井両伍長以下八名の犠牲でしばらく時間を稼ぎ、第一小隊の危機は去った。中隊長は、第二小隊の第一分隊、第二分隊、弾薬小隊と指揮班とに分散して壕を掘り、陣地に着くように

命じた。隊長はこれによって敵襲にもなるべく損害を少なくするよう苦慮しているようだった。中隊の向かいの山頂近くに我が野砲陣地に構築されていると聞かされたが、朝からの敵空軍の爆撃や機銃掃射は反復攻撃を繰り返していたが、我が軍の野砲陣地はびくともせず、凄じ襲撃にも目のように固く閉ざっていた。アメリカ軍は攻撃を止めて帰って行ったが、敵が射程距離まで進んできたのか、今まで沈黙していた野砲陣地から激しい砲撃が始まり、敵はかなり痛手を被ったらしかった。敵は機数を増して猛攻撃に移ってきた。しかし、我が野砲陣地は沈黙し、だまってじっとしていた。

六日目には爆撃機が三、四機と交互に攻撃を加え、バレテの山の様子がわからなくなるくらい土煙をあげたが、見方の野砲陣地はいつもと変わらず、じっと沈黙していた。アメリカ軍が引き揚げた後、数十分して裸の砲陣地から一斉砲撃があった後、陣地はまた、沈黙した。恐らく野砲陣地中の将兵は、弾のある限り陣地を捨てないだろうと思われた。

野砲陣地の攻略で思わぬ停滞をしていたアメリカ軍は翌日から、ところ構わず機銃掃射と小型爆弾の雨を降らせた。分隊の初年兵の吉田は「アメリカ軍はこんな無駄な弾があるのに、日本軍は弾はなし、友軍機も飛ばない」と口惜しそうに言うので、私は「今の日本軍は撃てない、飛ばない、これでは勝てない。これが我々の戦争さ」と吉田に語りながら自分にも言い聞かせた。

アメリカ軍は、朝になり日本軍がいると猛攻撃をし、日暮れになると基地に飛び帰る。夜間に敵陣地に斬り込みをするといっても、砲隊の悲しさ、一個分隊に小銃二挺だ。もう少し持っていた弾薬小隊も、先日、伊藤伍長が部下と共に小銃を持って戦死している。

中隊長は「また、斬り込みをやるというのか。武器なしで戦死するためやるというのか。大切な部下を失いたくない」と許さなかった。食糧も、将校・兵の別なく、一日に飯盒に五分の一あるかなきかの米に、少量の塩をふりかけたものだ。一度炊いたら三食分で、お粥みたいなものに水で量を多くして空腹を満たして

いた。

午後五時を過ぎると観測機は去って行く。我々が一番解放される時のようだ。こんな時、同じ谷間の歩兵軍曹に「歩兵砲は我々速射砲と違って敵を撃つ機会も多いでしょう、今までにどのくらい撃ちましたか」と話すと、「砲は持っているので射撃はしたが、撃てば爆撃や機銃掃射と迫撃砲でやられ、敵に与えた損害はあったかなかったか分からぬうちに見方に犠牲者が出ています」と嘆いていた。

「それに今、撃てる弾は何発ぐらいかな。戦争がいつ終わるか分からないが、発射命令が出たら撃つが、一発か二発では、その数倍の迫撃砲と機銃掃射で分隊はみな討ち死にするでしょう」

「いよいよ最期で、中隊から配られた弾を撃ち尽くすことができたら本望だし、先に逝った戦友に申し訳ができるということです」

「皆の魂は九段の社で祀られるが、君もそうだと思うが、このバレットで戦う兵隊の約束された宿命ですよ」と溜息を洩らし、

「でも勝利のない戦いに死んでいきたくもないが仕方あるまい」

と飯盒炊さんの小さな火を眺めながら、中年の軍曹殿は洩らした。しかし、その弱音を打ち消すように、

「最後という時がきたら、軍人らしく覚悟を決め、戦死した戦友の跡を追わなければ」

と、我が分隊の兵隊たちの顔を見た。

「戦死する時がきたら、潔くみんなで亡き戦友に会いに行きましょう」

と兵隊たちも笑った。私も歩兵砲の軍曹の話聞きながら、この戦いの宿命を考え、まだまだ来るであろう苦しい戦いと、戦死という悲しい運命を考えた。

その後私は、第二小隊、第二分隊長とし、常に死と背中合わせで、しかも部下の命を預かりながら、命令を遂行するため戦っていた。かくて、五月二十一日夕刻、マリアの高熱で前後不覚の状態で、うなされるなか、「中隊全員は陣地を捨て速やかに脱出せよ」の命を受けた。その後私は一人の放浪の負傷兵として敗走するのだが、私は歩兵科の出身である。白兵突撃

は歩兵の本領であったが、今の斬り込みはただ「斬り込み、死守」の命令のもと戦死していくだけであった。私は「俺は必ず生きて峠を脱出する、無闇に死なない」と、ついに生き抜いて現在があるのである。思えば余りにも犠牲の多い悲しい戦いの連続であった。

【解説】

独立速射砲第十八大隊（威一七六五三部隊）は第十四方面軍の尚武集団に属し、ルソン島の北部山岳地帯で戦闘したのであるが、尚武集団に属する独立戦闘部隊は次のごとくであった。

独立戦車第四・第九中隊

臨時第三步兵隊

独立速射砲第十八大隊、同第十九大隊、同第二十三

大隊、同第二十五大隊、同第二十七大隊

中迫撃砲第七大隊

野戦重砲兵第十二連隊、仮編自走砲大・中隊

独立機関銃第十一大隊、同第十二大隊、同第十三大隊、

同第二十六大隊

野戦高射砲第七十七大隊、同第八十四大隊、同第八十九大隊、野戦照空第二大隊

第十二機関砲隊、野戦機関銃第五十一中隊、同第五十二中隊、同第五十三中隊、同第五十四中隊、同第五十五中隊

特設第七機関砲隊、同第三十六・同第三十七・同第三十八・同第三十九・同第四十・同第五十九・同第六十・同第六十一・同第六十二・同第六十四・同第六十八・同第六十九・同第七十二各機関砲隊

独立速射砲第十八大隊第三中隊（体験記執筆者藤森庄之介氏所屬）が指揮下に入った第十師団（鉄第五四一〇部隊）の編成は次のごとくである。

歩兵第十連隊（岡山）、歩兵第三十九連隊（姫路）、歩兵第六十三連隊（鳥取・姫路）、搜索第十連隊、野砲兵第十連隊、工兵第十連隊、輜重兵第十連隊、第十師団通信隊、同制毒隊、同野戦兵器勤務隊、同第一野戦病院、同第二野戦病院、同第四野戦病院、同病馬廠、同防疫給水部、同藤里大隊、同長谷川中

隊、同橋本砲兵中隊、同第二・第三菊水隊、同井上大隊、

独立歩兵第十一連隊（威第五三二四部隊）、独立速射砲第二十六大隊一部（威第一四二〇三部隊）、同第二十一中隊（威第一三三二一部隊）、中迫撃砲第六大隊（威第一二四三三部隊）、野砲兵第二十二連隊第三中隊（垣第六五五八部隊）同師団主力はバレット峠で米軍と百日間にわたる戦闘を展開した。

比島全土の今次対戦での戦没者数は五一六、〇〇〇人で、地域的には全軍最多の戦没者数である。

第十四方面軍（比島派遣）の主要兵団は次のごとくである。

〈尚武集団Ⅱ北部ルソン〉
第十師団（鉄）、第十九師団（虎）、第二十三師団（旭）、第一〇三師団（駿）、第一〇五師団（勤）、戦車第二師団（撃）、独立混成第五十八旅団（盟）、同

第六十一旅団（鏝）

〈振武集団Ⅱマニラ東方山岳地帯〉

第四十一軍、第八師団（杉）、マニラ防衛軍

〈建武集団Ⅱクラーク西方山地〉

第一挺進集団（鸞）を基幹。海没生き残り將兵、兵站部隊、航空関係部隊、軍艦を失った海軍將兵、第一航空艦生き残り等

〈第三十五軍Ⅱミンダナオ島〉

第十三師団（豹）、第一〇〇師団（抛）、第一〇二師団（抜）、独立混成第五十四旅団（萩）、同第五十五旅団（菅）

船舶部隊 第三船舶輸送司令部マニラ支部（暁第二

九四四）他

航空部隊 第二飛行師団（鷲第九一〇九）

第四飛行師団（翼第一一六〇一）他

〈レイテ島関係主要兵団〉

第一師団（玉第五九一二）、

第十六師団（垣第六五五一）、

第二十六師団（泉第五三一一）、

第六十八旅団（星第一〇〇〇一）、

第一〇二師団二個大隊、第八師団歩兵第五連隊、他

第三十師団歩兵第四十一・第七十七連隊、独立混成

第五十七旅団（桂）、独立歩兵大隊レイテ派遣隊、

同第五十八旅団（盟）、独立第三八〇大隊、他、

同第五十五旅団（菅）、独立第三六四大隊、

戦車第二師団（撃）第六八連隊、第十連隊の各第一中

隊、

第二挺進団（高千穂隊）カモテス支隊

比島に対する米軍の主要攻撃・戦闘

昭和十九年

九月 ミンダナオ空襲、比島中部空襲、中部比島

（レイテ・セブ・ネグロス）空襲、ファブリカ基

地空襲、主要港湾空襲、マニラ方面空襲

十月 米軍レイテ湾口の島上陸。米空母レイテ・ル

ソン島攻撃。大本営レイテ・ルソン決戦決定。米

軍レイテタクロバン占領。南方軍司令官、山下第

十四方面軍司令官に「中南比・レイテ地上戦」を

命令。米軍レイテ島ダガミ占領

十一月 我が第一師団レイテ島リモン附近で遭遇戦展開。米機四五〇機マニラ空襲。米空母マニラ湾攻撃、米機動部隊マニラ方面空襲

十二月 第十四方面軍、レイテ地上決戦断念と南方軍に意見具申。米機動部隊ルソン島の我が航空基地空襲。第十四方面軍レイテ作戦中止

昭和二十年（主としてルソン島）

一月 「天王山の戦いはレイテから全比島に拡大」。

米艦隊リングアエン湾侵入。マニラ死守企図を放棄。

米第六軍リングアエン湾沿岸上陸。米軍バンバン飛行場占領。米軍クラーク西山地攻撃開始。

米軍クラーク中飛行場占領。米軍サンアントニオ上陸。マニラ東南七〇キロに上陸

二月 米群マニラ市内進入。我が軍マニラ撤退。

米軍バターン半島攻略完了。マニラ城内激戦

三月 米軍マニラ完全占領。

米軍サンフェルナンド占領。

四月 米軍レカスピ半島上陸。

マニラ湾ガバレロ島玉砕。米軍バギオ占領

五月 九日バレテ峠失陥。十九日サラクサス峠失陥。マニラ東方海軍防衛隊インファンタ地帯放棄、アゴス河中流山岳に撤退。

六月 米軍北部バンバン占領。十二日バレテ・サラクサス峠激戦。北部タクボ失陥。米空挺隊アパリに降下。ツケガラオ失陥。カヤバ全道失陥

七月 四日 ルソン島の戦闘終了。

五日 マッカーサー元帥、フィリピン全域解放終了を声明